統一

第百七十三號

明治四十二年七月十五日（毎月一回十五日）發行

目次

○人道の本源　大僧正　本多日生

○遅羅の佛教觀　陸軍歩兵少佐　井上一次

○日蓮上人に對する誤解に就て　本多日生

○自我感應如是　在米國　横山南山

○報道廣告等

人道の本源

（於淺草倶樂部講演）

顯本法華宗管長　本多日生

地方自治團体の健不健は一國勢力の消長する所にて最も戒心を要す近時社會改良若くは地方改良の急要を唱ふる聲益々盛なるは欣ぶべきことなり其爲には種々の會合あり組織あり政府は制度の上に改善を行ひ人民は有志者に由りて努力せらる其企畫多樣にして殆んど新にすべきものなし、唯遺憾に感ずることは是等公私の改良事業に統一せる思想なきと是なり就中教育のことは其根本義を爲すものなれど現時學校倫理の威力甚だ乏しきことは慨嘆に堪へず思ふに宗教心の衰退は良心人の思想を羈束する能はず學校倫理の根底に侵すべからざる權威を有せず只皮相の見々臨処するに過ぎざるが爲めなり而して現今實際宗教家の側に就て見るも各自宗派觀念に囚はれ排擠詆誹を事とし或は形式に流れて寺坊の數を增し建築の壯麗を競ひ或は僧侶が生活其ものゝ爲に市街動行するが如き類にて誠意救濟の念慮に出てたるもの尠し僧侶既に然り一般信徒に宗教上敬虔の態度なき亦怪しむに足らざるなり

宗教は人を教ひ社會を改良し國家の進運を補助するを目的とす此の大眼目を忘れて單に宗門の爲にのみ存在すべきものにあらず其教理は如何に高尚なりとも若しも人の爲め世の爲め何等益なきが如き宗教ならば一切根本的に破却して可なり、善美なる社會生活、是れ宗教が建成せんとて努力する唯一目的なり、悲しい哉近時宗教の威力衰へたる故にや今人は只法律制度にのみ據りて善美なる社會を作り得べしと心得る結果準繩規則日に密にして善政必ずしも擧らざるが如し、法治固より必要なり然れども法治にのみ因りて善美なる團体生活を贏ち得べしと思ふは大なる誤なり元來道義は今なり規則は末なり人道生義の觀念微弱なる爲め規則の拘束己むを得ずとするも出來得べくば人々互に相讓り相約し法をして不要に歸せしめんか其生活は一層に麗はしきものなるべし、團体生活に同情の交驩なくんば

法文の繁冗は徒らに人情をして輕薄紙の如くならしむるのみなり故に今日地方自治体若くは一般社會の改善を急要とする以上教育家も宗教家も官吏も皆共心努力人道の本源に就て考慮を致さゞるべからず予は進て少しく人道と佛教との關係に就て披陳する所あらむとす今の倫理學者が徒らに科學思想に羈束せられて却て社會人心の根底に入り支配するの力薄弱となりたると共に宗教が又實社會との關係を離れ宗派思想に拘束せられて世道人生に益なきものと爲らんとする共に大に警ひべし社會救濟を本領の第一義とする宗教家は其人道に對する立脚地を失念すべからず爰に人道とは即ち人が現世に於て當然履行せざるべからざる道にして斯の道は個人として必要なる外に國民としても亦必要なり而して其行はるゝ所は國家の區域をも超脱して世界一般人類に光被せらるべきものなり斯の道は儒教に於ても既に切に提唱せられたる所にして而して佛陀の說き遺せる凡ての經典教訓の中に皆包容せられたる所なりさればなや佛教は活きたる生命を有ちて其時代と交渉し發達し來れる所以にて古來の佛教史を通じて回顧するに世道人生を離れては佛道の存せざる所以を明知すべきなり

最近倫理學に謂ふ人道は第一心理學を材料とし生物學進化學に根底を置き社會學人類學を參覈したる結果益々廣汎のものとなり共同生活が人類存在の要義なる以上は單に人は精神界のみならず肉躰上に於ける不清潔若くは不健康の類をも不道德の一として論ずるに至れり斯の如き思想は儒學にても彼の身躰髮膚是を父母に受く敢て毀傷せざるは孝の始也抔の如き例なきに非ず心理學は又人類の性能を知情意の三つに大別し知は益々完全ならんことを要し情は愈々美ならんことを要し意は極めて强健ならんことを要するを以て更に知情意の發達と其調和的整正は人格終成の目的として大に努力せざるべからざる所以を唱導せらるゝに至れり

生物學に因りては動物發達の徑路人類共存の理法と及び共同生活は人類の本能にして相頼り相助くるの性は其根本思想たり人は假りにアダム、エブの子孫とするも單に父母の間に生れたるものなりと云ふのみにては人といふべからず共同生活の法を具へて初めて人とし存在するを得、吾人々類は生るゝや否や直に他と關係ある社會の中に在り而して此社會生活を爲し得ることお人として極めて必要條件なりとす人類學社會學の研究に由れば知情意の發達鈍きもの及び共同生活の性能乏しきものは生存競爭の中に立ちて發達すること能はざるものと解せらる故に教育を進めて人格の向上を計ることは最も大切なり是に因て人道の修養は完全なる性格を作るの道にして二樣の意味を有することを知るべし即ち個人性人格の完成と社會性人格の完成是なり是を以て見れば人は已れと關係せることのみに同情あり意志强しといふは未だ以て完全なりといふべからず、社會共同の爲め盡すに於ても同情あり意志强健の人たらざるべからず、彼の泰西人士は個人性に於て最も發達せり而も共同性に欠けりなど稱ふるものあるは非常なる誤りにて社會組織の根底を、主として個人の上に置き個人的思想の發達著しきは勿論其共同一致の發作力强盛なるとも亦我等が事實眼前に見る所の如し以上の如き思想の上に立ちて稱する近時の人道主義が益我等の信ずる佛陀の道と密邇の關係あるとを知るに及んで予は衷心愉快を感ずるものなり

孔孟の人道即ち儒教に就て稽ふるに其根本は鬼神と云ひ天と云ひ天道を畏敬するの思想は大學中庸、易經何れの書にも滂礴する所なり儒教より此思想を除去すれば人道の根本義を滅却する譯なり儒教が宗教思想を包含せず抔唱ふるは經書を讀まざるものゝ言ふことなり人往々此根本思想を忘却し其用道たる五倫五常をのみ說かんとするは大なる誤りなり聖賢道を說く先づ其本を立つるを要とす中庸に有り允二執ニ厥ノ中ヲ一とは堯の舜に授くる所にして人心惟レ危道心惟レ微惟レ精惟レ一とは舜の禹に授くる所なり、されば堯舜の道は彼の中正至明なるものなり大學には君臣父子夫婦等の八條目と稱するも是れ道德の用を示せるに過ぎず大學の道は明德を明かにするに在りと稱し或は天命惟新なりと稱し或は日新、日々新、又日新など謂ひて道の據る所を示

せり惟新若くは又新の語の出る所以にて道は明德を明かにし衷心より湧き出てたる至誠本然の德を發揚するを主とし社會を改良し其發達更新を圖るを要とす至誠の流露する所は君と爲りては仁　父と爲りては慈、臣と爲りては敬、子と爲りては孝たり古聖賢が此心の本源を說いて愈々精ならんことを期する所以なり

道德的感應の變化萬別なるも精神の根底一なること知るべし小德は川流し大德は敦化すとある如く即ち小德は百川の流るゝが如きも大德は海の包容して溢るゝなきに似たり又德の悖らざるは天地の大なる所以、彼の上天の事は聲もなく臭もなく至れも矣との語もあり眞の大德は温藉たり徒らに聲色辭令の大なるは未だ稱するに足らざるなり、即ち聲色を以て民を化するは末也とは此謂ひなり斯く根本は動かざるも變通は自在なるを以て聖人の德とす語に曰はく君子の道其端を夫婦に造す其至れるに及んでや天地に察かなりと此の天地の大德を顯彰し敬畏することを忘るべからず、俗に天道に對して相濟さぬといふ言葉は實に權威ある立言なり

或は日々の職業を疎にしては天道に濟さぬ陰にて惡事を爲しては人知れずとも天道が許さぬ坏の觀念は實に一念至誠に歸したるものにて此心身邊を離れずは善行の人たり得べきに近時道心の微なるや口既に斯かる權威ある語を唱ふるものもなく其偶々是あるも無意識に稱するまでのことなり

孔子の曰く鬼神德夫　盛說と面して其鬼神の何たるやは明言せざるも穩として已まざる大德あるものと解したるは明かなり又殷の師を喪はざるや克く上帝に配すといひしは殷が師を喪ふたる時は上帝を忘れたる時を暗示せり又天命の昭明を示して峻命不易なりと云ひ、又使下二天下之人一齊明盛服ッテ以承中祭祀上洋々乎トシテ如レ在ニ其ノ上一如レ在ニ其ノ左右一と敎へたり以て聖人の鬼神と天を畏れたるを推知すべし我朝聖德太子も亦天といひて日月とは謂はず斯の如き鬼神や天や直接其形体を語らざるも冥々の威嚴を認識せしめんとして說明に努めたるは諒知すべし加ふるに身親ら敬虔の態度を以て是に奉仕すべき所以を明示せられたり此德は天子庶民皆

拜すべきものとて今日に於ても天皇の御座は神聖にして萬機の由て生ずる所なるが然れども此御位の神聖なるは政治上に於ける最高位にして道德上精神界に於ては至尊も尙朝夕に禮拜畏敬せらるゝ物あるべき筈なり是實に只人の見ざるを恐れ聞かざるを恐るゝ道義の根底にして亦是れ宗敎の本質なり斯くの如き凜然たる精神を確認して初めて道の諸用を說くべし是に至りては儒敎も亦純然たる宗敎思想に胚胎し此思想を除去しては人道を求むるに由なかるべし

曾て吉田松陰先生宮闕を拜するの詩を見るに開說今皇聖明、德、敬レ天、愛レ民、出ニ至誠一とあり此精神即ち儒道の根本義なるべしと了解したるとありしが斯の如き敬天至誠の道を認識ずるものにして初めて身を以て救濟のことに當るべきなり

明治二十三年下し賜はりし敎育勅語には忠孝友和以下の諸德目を擧げ給ふて終に斯道は實に我が皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の俱に遵守すべき所是を中外に施して悖らず是を古今に通じて謬らずと仰せられたるは彼の堯の允ニ執レ厥ノ中一の至言と、その意異るなし又軍人に賜はりし勅諭には忠節、禮儀、武勇、信義、質素、の五箇條を擧げて最後に之を行はんには一の誠心こそ大切なれと仰せられたるは即ち諸德を綜合し其根蔕を示されたるものなり、現今我邦に於て謂ふ所の道德が儒敎と密接なる關係を有すると論ずるまでもなく昨年下し賜はりし戊申詔書の如きも上杉鷹山公の調誡是が起草の中堅を爲すことは學者の皆認むる所、而も公を啓發したるは儒者なり維新後屢々下されたる諸勅の中に顯はれたる德目を系統的に調ぶれば所が儒敎　多大の關係あると爭ふ可らず然れども思想の本源に至りては固と人心至誠の煥發する所皇祖以來繼承せる大精神が歷史上儒敎と調和したるもの即ち遺訓として示されたるものなり

以上の思想は佛敎と亦親しき關係あり佛性と云ひ法心と云ふ固より至誠僞なきものなり純精透明なると彼のエッキス光線に照して見るも電氣にて分析するも一點の汚濁を止めざるべし信心の狀態、安心の狀態、亦是

なり、安とは中庸の止る也定也と解せると異なるなし、吉田松陰國線に處し長州を出る時訣別の辞を白布に認め遺せるを見るに又至誠貫徹の一念のみなりき曰はく至誠にして動かざるものは古より未だ是あらざる也知らず身を以て之を驗せんと、其絶筆と稱するものに曰はく學問淺薄にして至誠天地を動かす能はず、我德足らざるなり誰をか恨みんと我宗祖日蓮上人が首の座の危難を逃れ賜ひしは至誠天地を感動せしめたるものなり歴史上の事蹟を見るに科學のみにては説明し得べからざると數多あり新田義貞が稻村ケ崎に佩刀を投じて海神の怒りを鎮めたりといふの類、事實の如何は史家の穿鑿に讓るとして亦至誠の致す所ならずんばあらず世には科學安信の結果至誠の靈妙功德無邊なるを蔑視せんとするものあるは甚だしき心得違ひなり、世に宗教的敬虔の念慮薄らぐ時は道德の操守も薄弱と成り人人相食み相害して怪しまざるに至らん過般福島線鐵道客車脱線の實狀を目擊したるものゝ談に依れば列車が阪路に懸りし時客貨車の重量に堪へ兼ねて逆行せんとし車輪空轉せしかば機關手は早速御止めを爲したるに線路上を軌も落る摩擦の爲め發熱を發し數十臺の車輪は火焔の燃ゆるが如く赤熱して落下し來るの慘狀譬ふるに物なかりしと云ふ社會に宗教思想の必要なるは車輪に於ける油に等し圓滑なる運轉進行を爲すの根原なるに之を措いて顧ざるが如くんば罪惡即ち旅路に充ち火炎地獄を現出すること疑ひを入れず佛教に謂ふ信心は人道の至誠なり人々信心安住の地に入れば諸惡德は問はずして自然に消滅すべきなり然るに今の道德家教育家は斷片的道德を説くと詳密なるも徒に宗教を無視して其根本たる信念の充實に思ひ至らず學説盛にして實行振はざる所以なりとす爰に信心と謂ふも迷信尚可なりと謂ふにあらず如何はしき邪教に踏み迷ふて益々知慮の迷蒙を來すが如き警むべし儒學にも是を祭るべからずして祀るは諂へる也とあり只獨り眞の信仰のみ道德に實行力を與へ生命を與へ开をして光あらしむものなり

佛教は悉有佛性と云ふ如何なるものにも佛性の本能力

は存在するなり大學の明德を明にすると同じく是を章明すれば佛身たり是を諸海に付すれば禽獸たり朔の如く本來我身に光ある佛性の存ゝするを以て他の又光明ある佛体に接しても能く感應す、心の光を發揮すれば商賣も繁昌すべし諸種の煩悶も免るべし强盜殺人の如き太罪囚にても眼前肉身の親子に對しては恩愛の情切なるものあるに非ずや斯の精神を擴大すれば皆君子人たるべし捨つる神助くる佛抔言ど道路の蒸民皆是れ佛子なり慈悲の佛身は到る處に往來せり欣び勇めよや

古來四恩と稱する中には衆生の恩なるものあり衆生は諸物發生の根原にして人々は各自其恩を受けつゝあり報謝の心あるものは又必ず何等か社會の爲めに盡力せざるべからざるなり平素安居して世を益し人を利するを圖らず現存已れの位地境遇を以て人身の力是を致せるが如く得、自己の外に他の恩あるを知らざるものは衆生の恩を冒瀆するものにて天譴必ず淺からず試みに思へ一椀一箸、一粒一食、皆是れ衆生の生成する所其苦辛容易のものに非ず故に人は各自其長ずる所に從ひ報恩の心掛けあるべきなり、世は情けの保合なり故に佛陀の教は智慧の教なると共に又慈悲の教なり社會の調和發達に大なる効果ある所以なり釋迦の如き日蓮の如きは皆社會の大功勳者なりされば人各宗祖の意を體して小なる釋迦たり小なる日蓮たらんと心掛くべきなり佛陀の教は又完全なる人格を養成し尊重すべき思想の發達を圖る所以なれば信者も又之と一致すべき行動を執り人道に矛盾し世に害あるが如きの所爲は謹しし爲す勿れ殊に宗教と教育との連絡調和を圖らざるべからず此一事は國家の大事にして輕卒に斷ずるを許さずと雖も今や人心の歸向する處を正うし頽廢せる道心を挽回せんには此一事最も大切なりとして微力ながらも既に當局者までには獻言しつゝあることなり殊に道を宣し法を説く者にありては從來の固陋なる思想を切捨てよ彼の徒らに末來觀念にのみ捉はれて現在國家の光たるべき本分を遲すを忘るゝが如きことあるべからず今や本覺の眞を發揮し眠りより覺むべき時なり醉より起つべき時なり衆生濟度の爲めに不肖ながらも警鐘

を亂打して一般の覺醒を圖らんとするは予が現頭の念願なり

暹羅の佛教觀

參謀本部員陸軍少佐　井上一次君　講演

日蓮上人の事を研究する本會の講演としては、少し懸け離れて居る樣でありますが、他山の石以て我璧を磨くべしと言ふこともありますから亦多少の御參考には相成ることゝ思ひ、本會幹事諸君の御依頼に應じまして本日こゝに暹羅國の佛教の話しを致そうと思ふのであります、

私は明治三十九年の暮より、昨四十一年の春へかけて、約二ヶ月間ばかり、暹羅國へ旅行を致しました、此時同國の佛教に就て視察いたしたのでありますが、多くは暹羅の國勢調査の上から見たので、專門的に深遠なる研究を遂げたのでは御座いません、唯だ國力の上に如何なる影響があるかといふ事に就て、少しばかり調査致した結果と、それから一般の佛教狀態とを述べて、諸君の教へを請はんと欲するのであります、

西洋人の書いた物に依りますと、暹羅へ佛教が初めて入つて來たのは、紀元四百三十年頃で有まして、東漸塞及び、印度の兩地方から渡つて來た所の僧侶に依て、宣布せられたとあります、即ち我が允恭天皇の時代であつて、日本に傳來したよりも約百二十年程前であります、

暹羅の佛教は、現今は二派に分れて居りまして、一は舊教で「マハニカイ」と稱し、一は神教で「ダマユライカ」と稱して居る、新教は現國王の父なる「モンクット」の開いたものであります、然し新舊とも其の教義には別に差異は無く、讀經の法、法衣の制、托鉢の式等に幾分の相違があるのみだと申すことであります、

暹羅の佛教は、印度佛教の眞髓を傳へて居ると同國の人は申して居りますが、其の教義上の事は能く解りませんが、然し私の視察した所では、如何にも尊嚴な趣があつて、往古の印度の佛教を其儘移したかと思はる、感かあります、

憲法上では、信教の自由を許して居りますが、然し佛教は、國教と爲つて居る、而して政教一致の國で、國王が躬ら政を執り、別に總理大臣と云ふ者は無い、國王は佛教の最高保護者で、佛教に關する行政上の監督は、文部省の一局たる宗教局で司つて居る、何故に文部省が佛教の監督を行るかと云ふに、佛教の教義は即ち國内修身教育の基礎と爲つて居るからであります

夫れから教務上の監督は、國王の任命したる四名の僧正がやつて居る、一は北部、一は南部、一は新教、一は隱遁者を、各々統轄して居るのであります、此の四僧正に、人民の尤も歸依尊敬するところであつて、國王と雖合掌の禮を爲すのであります、一体此の合掌の禮は、此國では一般に長者に對する禮儀で、日本の敬禮の如きものである、然し神佛に對する信心より外に合掌の禮を見ない私共日本人には、誠に妙に見えるのであります、

國内に於ける寺院の數は、約一萬でありまして、暹羅全國の戶數は、約六十萬戶であるから、六十戶毎に一個の寺院がある比例である、僧侶の數は約十二萬で、其の内尼僧が一萬五千人程だと云ひますから、全國の人口約六百萬人に比例しますと、全人口の約百分の二を占めて居る、然し暹羅の總人口は六百萬人の中で約二百萬の支那人の外、安南、カンボジヤ、馬來人等が雜居して居るから、是れらは純粹の佛教徒ではない、眞に佛教を信じて居る暹羅人は僅々百六十萬人内外に過ぎないからして、僧侶の數は暹羅人の約百分の七を占めてるので、即十五人に就き一人宛の僧侶が居るのである、僧侶の多きこと實に驚くの外はない、それですから、市中を往來して居る僧侶が隨分と多い、僧侶の社會に於ける地位は如何かと云へば、僧侶は社會の最上位を占め、一般人民は往來で僧侶に逢ひば皆合掌の敬禮を致します、然し僧侶の方では行らない、私が曾て師範學校を觀察に行した時に、生徒は總て起立して敬禮したけれども、僧侶は着席の儘で敬禮をしない、僧侶は納稅の義務もなければ兵役の義務もない、それ

て國内一般に佛教を信奉するの念が厚いと共に、寺院の建立、僧侶の衣食に對しては、喜捨布施の風が盛んであるから、僧侶は毫末も衣食住の顧慮心配はない、朝早くバンコックの市中なそに行つて見ると、托鉢の僧侶を以て充滿して居る市中の各戸には、炊いた飯と御菜を列べて置いて、僧侶が讀經をして通行すれば、市民は爭ふて之を施與する、僧侶は一日の食事を得れば其れ以上を求めない、皆寺院へ歸る、寺院では炊爨の必要もなければ、隨つて廚房の必要もない、それから衣服は凡て人民から喜捨する、葬儀をいたします時は、多く法衣を贈りて供養の意を表します、斯くの如く、衣食住の顧慮といふものは少しも無いからして、僧侶は終日讀經を事とし餓ゆれば食ひ渴すれば飲み、悠々自適唯だ佛の道を樂むのみである、法衣に關し吾々が一種特別に思ふのは、上は大僧正より下は一介の沙彌に至るまで、凡て黄色は八條の袈裟（講演後或る人八條ではない七條でせうといへば、それでは一條おまけが付いたのですとは中佐の訂正）の樣な物を纏ふて居るが、是れに依て階級を差別することは出來ない、此の點は我國にありて、僧侶の多くが金衣玉繡を纏ひ、これを以て婦人の眼を眩し彼等の尊敬を支持せんとするに比すれば、暹羅の僧侶が如何にも高尚深遠の感を與ふるのである

此の國では僧侶には女色は絶待に禁じてある、從つて妻帶は無い、從來暹羅の法律では若し此の禁令を破るときは死刑に處するの制であつたが、近來は此の禁を解いた、然し今日と雖、一二の破戒の徒はあるかも知れないが、一般に品行方正で毫も俗風なく、充分に戒を持つて居る、其の一身を堅く持する點は感服に堪へない

佛教の勢力は斯くの如く大したものであるから、各都市には工場などの盛大なるものは無いが、寺院は頗る壯觀を呈して居つて、首府盤谷の如きに至つては、輪奐莊麗巍巍然として空に聳ゆるものは、皇族の邸宅でなければ、悉く寺院である、屋根の瓦の如きも遠方より光つて見へるが皆金を用ゐてあるのである、宮中には

歴代の國王の廟所があつて、金銀珠玉を鏤めてあつて其の立派なること實に豫想の外である、亦國王は歴代必ず一個の寺院を建立し冥福を祈られる、現國王の建立に係る「ドウシット、パーク」の寺院なゞは、盤谷有數の壯觀を極めて居る、

寺院の建築は、歐羅巴風と暹羅風とを折衷して居て、本堂の如きも、「イルミネーション」を點ずる爲めに、天井一面に五色の電氣燈を裝置してある、又佛前の燈明の如きも電氣燈である、暹羅人は一体に新奇を競ふ風があるからして、其の結果勉めて文明の器具を應用せんとするのである、從來我國のジミな御燈明を見て居る我等には何だか森嚴な感じは起らなかつた、然し今日寺院に用ゆる蠟燭なども釋尊の時代には無かつたものだが、後に盛んに用ゆるに至つたのであるから、今日電燈を用ゐても差支は無いでせう、我國の寺院でも斯る方法を採用したならば、先般の傳通院の火災の如く蠟燭から起るような事は無からう、僧侶の居室の如きも、寢臺もありガラス窓もある、然し唯感ずべきは各居室には必ず整然と佛像と數卷の文經が安置されてある、泰西の利器を利用するとせば、別に何等の批評すべきものは無いけれども、日本に於て佛寺を觀たる眼を以て見たる時は、何だか一種異樣の感がある、

暹羅人は、舊を捨て新を好むの風多く、昔の寺院の如きは殆んど朽廢に委して顧みない、同國の古の都たりし盤谷の北方「アユチヤ」に行く時は、古刹が處々に朽廢して散在して居る、又首府たる盤谷に於ても頽廢せる古寺が處々にある、國王自らも佛教興隆に熱心のことであるから、斯る寺を改築せん爲めに、明治三十九年の秋には、自ら慈善市を開き、國王は寫眞師となり、皇太子は、演劇の興行主なり、其他の皇族も亦店舗を開きて、衆人の喜捨を乞はれたと申すことである、佛教の最高保護者たる國王としては、勿論當然であるかも知れぬけれども、我國にては到底見られない所である、

私が盤谷に居つた時、ワッサキ寺の僧正を訪問した、此寺は佛骨を安置せる有名なる寺院で、曾て日本に佛

骨を分配せしは此寺てある、僧正は年の頃は五十餘歳て、大德の御方てあるとの評判があつて、國王も屢々駕を枉げられて教を受けらるゝとの事である、寺は其の境内數萬坪あつて、修行僧の常住するもの二百人を超ゆる位てある、此寺は古に於て建立したのてあるから純粹なる遏羅式の建築てあるが、僧正の居室にはテーブルもあるソファーもある、凡ての裝飾品が皆歐洲的てある、予が刺を通じて面會した時は、先づ握手の禮を以て迎へたるが如き我國の佛教僧侶と全然趣きを異にして居る、それから室内に歐風の額や安樂椅子もあつた、僧正は日本人を遇すること極めて懇切て、日本人の衣食に窮する者に對しては常に一室を準備し宿泊せしめ、又同寺に寄宿を欲するならば、喜んて之を迎ひるといふことてある、僧正は予に對しては非常に好意を以て迎へられ、歸る時には自己の室内にあつた佛像一体とパリー語を以て彫める經典を贈られた、此經典は因果經てあると云ふことてす、僧正は是非一度日本に來遊したいと云ふて居られた、何か好機會を以て之を迎へてやつたならば大に喜ばるゝことゝ信じます、

此國の佛教が、一般人民に對して、如何なる感化力を及ぼして居るかを見るに、遏羅人は國王を初め人民に至る迄必ず一度は佛門に入り教誡を受くることに成つて居るからして、佛教が人心を支配すること著大てある、遏羅の修身の本義、即ち倫理は五戒てあつて、學校に於ける修身の要義も總て之に同じてある、人民は生者必滅の理に基き、唯天與の壽命を最も安穩に送るを以て唯一の目的として居る、遏羅人が理財、道に敏からず、競爭心なく、商業の如きも大部分は歐人の手に歸して居る、競爭心が無いから勇武の氣象にも乏しい、陸軍ては第一に取るのは競爭心てあるが、此國ては此の競爭心を起させるのは甚だ困難てあると云ふことてある、是の如く人心が消極的となり消沈して居るのは、其原因は佛教の教義に基くようてある、形式的佛教は盛んてあつても其の精神を失つて居る、現に予はラドブッと稱する衛戍地に至り軍隊を視察しようとしたが、明日は將校の葬式があるから、衛戍地一般に休業てあるから練兵を視せられぬ、此の夜は徹夜練兵場て興業物があつて、而して是れは死者の供養の爲めだと云ふて居つた、敬意を表するは當然の事てあらうが、練兵まて全然休むとは無弊害に陷つて居る一班を知るべきてある、

以上て遏羅に於ける佛教の現狀は大略御話し致しましたが、實に此國の佛教は國家の運命をも左右するに足るべき一の要礎て、僧侶の學識の如きは如何なる程度てあるか私の機な門外漢には能く解りませんけれども然し一國の上には必要がないように見へる、其れのみならず、漸次に各種の弊害を生じて來て、僧侶は動もすれば、社會の競爭に堪へざる怠慢者の巢窟となり、甚しきに至つては、近來は徴兵令施行の結果、徴兵忌避の具にさへ供せられんとして居る、又人口百分の七は僧と云ふ、斯る多數の僧侶が、妻帶を爲さない爲め、人口は漸次に減少するの原因となつて居る、而のみならす、毫も國の生産力を有せざると共に國民の生産力を及敢することゝ非常て人心に神益する所なきを以て遏羅國の寄生蟲なりと云ふも誣言てはない、實に國家富强の基礎を危ふするは寒心に堪へざる次第てある、

顧みて我國の佛教は、國家を害毒することは無いけれども、之を放任して置いたならば、如何なる結果を生ずるてあらふか、大に注意を要すべきことゝ思ふ、然し佛教本來の主義は大に國家に貢献し得べきものと思ふ、吾人は佛教殊に日蓮上人の教義主張の如きは、實に國家興隆の爲めに、最も必要なるものと認む、願くは我國内に此の偉大なる日蓮主義を鼓吹して、益々佛教の本面目を顯はして國家民生を救濟すると供に、遠く海外にある佛教徒にも大に其の恩惠に浴せしめたいと思ひます、

甚た粗末な講演て、且つ中には隨分失禮な語調も有つたかも知れませんが其の邊は何卒御容を願ひます、

左は六月十二日神田學士會に於ける天晴會第六例會の講演筆記なり未だ講師の校閲を經ず文責素より記者に在り讀者請諒焉

日蓮上人に對する誤解に就て

本多日生

日蓮上人に對する世人の誤解に就ては、その人格と主義の二方面より辯明するの必要を認めますが、先つ順序として人格に對する誤解を辯明し、更に進んで其主義に論及して見やうと思ふ、

世人の或者は、上人を以て極めて偏狹なる固陋なる宗教家と思つて居る、が、上人の人格は決して偏狹でも固陋でもない、寧ろ極めて圓滿なる玲瓏玉の如きものである、其偏狹なるが如く固陋なるが如く見ゆるものは、其主義主張の餘りに透明にして剛健なるに因るのであつて、上人滅後末弟門葉に列なりしものが、異教徒の反對政權の壓迫に抵抗する爲め、不知不識の間偶々偏狹に流れ固陋に陥りし弊風を生じた傾きはあらうされど公平なる見地より之を見たならば、上人の人格は決してそんなものではない、其事は先づ上人の發願を見ても判る、則ち上人は剃髪出家の當初、大願を發して『日本第一の智者となし給へ』と虚空藏菩薩に誓願し、最も公平に佛陀の本旨を把住すべく圓滿なる見地に立ちて、古來の佛教に對し一々批判考察の態度を取られたので、遺文には『隨分に走り廻り候て鎌倉と京と叡山と園城と高野と天王寺等の國々寺々あら〳〵習ひ廻り候し程に』とある。而も其年代は二十余年で、其已前にも亦餘程調べられてあつたのである、されば法然の主張せし位の事は『日蓮は十七八歳の時之を知れり』とある、斯く極めて眞率なる求道者として遊歴研鑽を積まれ、而も批判考察を苟くもせられなんだのである、今日眞宗の寺に生れたもの抔が、碌々上人の遺文を讀みもしないで日蓮は固陋なり抔と、無責任の批評を試むるのと同一の談てはない、又一度び上人の註法華經を見れば公平に何人の言をも之を容れ、寧ろ

自己に反對の意見をも其重要と目するものは、取て之を包容し玩味せられたる跡歴々として掩ふべからず、此筆法は亦遺文全体に渉りて證することが出來ると思ふ

次に世人は上人を目して、彼は叨りに他宗を排斥せし剛慢不遜の激論家にして罵詈惡口の言論多く、人格陋劣にして面白からざる人物なりとして居るが、上人の人格は決して然らずして、寧ろ謙讓の美德に富めるを反證し得る、それは遺文中『日蓮は旃陀羅が子なり』『魚鳥を混丸して生みし身なれば』『毒蛇か玉を含めるが如し』『日蓮が智解は天台傳教の千萬分の一にも及ばず』『理即に秀て名字に足らず』『戒法は身に一分も備へず』等の遜讓の語句、殆んど數ふるに遑なき程にて、決して、剛慢無禮の陋劣家でないのみならず、却て非常に謙遜の美德に富んで居らるゝのである、が而も一方主義より來る抱負は、發展的に非常に優大てあつて『我れ日本柱とならん』『日蓮を倒すは日本の柱を倒すなり』『日は東より出て〳〵西を照らす日本の佛法一閻浮提を照すなるべし』『迦葉阿難にも勝れ天台傳教にも越よかし』などの語を見ると、其面影が歴々として偲ばるゝのである、先般三宅博士が上人の主張中には日蓮以上に卓出せよと云ふことも、何れの個處にかあらんと言はれたが、彼の『天台傳教にも越よかし』の一句は確かにそれてあらうと思ふ

次に世人は日蓮は變通を知らずとして上人を貶するが是れ亦上人を知らざる謬妄の言てあつて、上人は變通を會得せられたる非常なる達見家てある、上人の語に『一切の事は國家に依り時に依ることなり佛法も亦此道理を辨ふべき也』『千經萬論を習學すとも時機に叶はざれば證なし』『いたう事候けざる事をは少々佛教にたがふとも其國の風俗に違ふべからず』等の示教があ、これ等は決して頑迷固陋の頭腦から出づべき語てはない、のみならず、上人は弘教の綱領として堂々として五綱の教判を示されてある、其變通の用意以て知るべきてはないか、斯く上人は決して無難な剛毅一遍の人てなく、頗る高雅優美の性を有して居られた、されば

こそ弟子三人に與へし問註得意鈔に、形を柔らげ体度を愼み猥りに言はぬ樣と用意周到の教訓あり、四條金吾に對しても亦、彼れが特性の癇癖を矯むべく、嚴密なる訓示を垂れ、念佛者眞言師等の頸を由キゲ濱に切らずば、彼々の堂を燒かずば、國家の前途知るべきのみと云へるが如き、時に或は激越の論調なきにあらねど、退いて安國論を見るに釋迦已前の佛教は其罪を斬ると雖も能仁以後の經說は其施を止むと斷じて、邪僧の糧道を絶ちて必然的に其邪教を廢絶せしむべく、謗法禁遏の手段亦其妙を極め、襟懷度量の宏濶美の辭に窮するの慨がある、次に自然の美人情の美等感情の流露に就ても、身延記に

『誠に身延山の栖はは千早振神も惠みを垂れ天下りましまさすらん、心なき賤の男賤の女までも心を留めぬべし、哀れを催す秋の暮には草の菴に露深く檐にすだくさゝがにの糸玉を連ぬき、紅葉いつしか色深うしてたえ〳〵に傳ふ懸樋の水に影を移せば、名にしおふ龍田川の水上もかくやと疑はれぬ又た後ろには蛾々たる深山聳へて梢に一乘の果を結び下枝に鳴く蟬の音滋く、前には湯々たる流水湛へて實相眞如の月浮び無明深重の闇晴れて法性の空に雲もなし、かゝる砌なれば庵の内には晝は終日に一乘妙典の御法を論談し夜は竟夜文誦持の聲のみす』

とある此文を一讀したならば、上人の決して我武者な武骨一片の人ではないことは、明かに判るのである、唯上人折伏の言動が、他をして宛かも奔馬の巖角にはねる如く感ぜしむるのは、夫は上人の主張の實發であつて、決してその人格の偏狹なる故ではない、此事に就ては上人親ら弟子等の思ひ寄りを忖度して、入報抄の中に、我師の法華弘通が成効せぬのは、餘りに折伏の强きが爲めである、『例せは道理ある問註に惡口の交るが如し』と述べ『日蓮反詰して曰く』と堂々其然るべからざる所以を論辯せられてある、要するに折伏は人格の偏狹より來れるのではなくて、全く主義の剛健なるより來れることを知らねばならぬ、

此點に就ては今少し論じなければならぬ事がある、そ

れは上人は通常各宗の祖師達と其選を異にして、知見極めて透明、信仰極めて熱烈、而して此二者相合して一代の行動となつたのであつて、此二に反對のもの則ち當時の知見朦朧信仰薄弱の者輩より見て、種々の臆測を上人の身の上に逞ふしたに過ぎない、今日猶ほ識見の不透明と信仰の不確實なるもの多き故に、上人を誤解するのである、三宅博士は先回の講演に於て、上人を以て東日本人特有の一本調子と言はれたが、自分は其一本調子に二通りあると思ふ、則ち單に熱誠より來れる一本調子と、今一つは熱誠と知見との二者合して來れるそれとの二つである、若しも上人を以て單に前者とすれば、それは上人を誤解せるものと云はねばならぬ、由來偉人は智力の發達と共に意思も發達せるもので單に意思のみとは謂じて言へない、たとへば劍術者が「サーコイ」との掛聲にも、技藝未熟の我武者の「サーコイ」と、鍛練熟達せる「サーコイ」の二つがある、角力の「ヨリキリ」「ツキダシ」迚も其通り、單に腕力のみとは斷言出來ない、或る禪宗坊主が何日でも、無言で以て指一本「ウン」と突出して旅僧を閉口まして居たのを見て、小僧が其眞似をしたら、旅僧其意を測りかねて躊躇して居たのを見て、和上は此小僧生意氣ものと行きなり踊り出て鉄を以て其「ウン」と突出した小僧の指を切斷して、そうして什麼か奈何ときめつけた小僧は痛さに堪りかねず涙を流して突伏して仕舞つた、要するに修練悟道を積んだものと積まぬものとは一樣には行かぬ、三宅博士も其人格の大鉢は一本調子の方だ、併し其一本調子は、西洋哲學東洋哲學を併せ呑んだ上に、時事問題の批評をも巧妙に切りまくる一本調子である、工藤チンキウの一本調子とは少し違ふ、日蓮上人は工藤式ではなくて三宅式である、上人は透明なる知見の上に論斷を試みられたので、日と月とは何れが明らかなりやと云ふ事は、今更問題にならぬと同じく、釋迦彌陀の優劣本末を兎や角爭つて居る、若くはそれに迷つて居る、諸宗を罵倒せられたのである、

次に日蓮上人の國家主義は、迎合であつて詰らないものだと一概に排斥するものがある、此點に就ても一言

せざるを得ないので、元來佛教家の多くは、解脱とか平等とか恰かも竹林の七賢人的に、世を遁れ國家を無視せる傾向を持て居るが、上人は佛教本來の立場が左樣に國家人生と沒交渉のものでない、寧ろ積極的に國家と教法との關係を見られたのである、之に就て最も有力なる批評は高山博士と木村鷹太郎君とで、就中木村君の評論は斯うである、世人安國論を以て日蓮の國家觀念の高調を云爲すれども、畢竟日蓮は國家を方便に見たるなり、佛法を思ふ念慮は厚けれども、『先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべし』と論ぜし所、全然國家を方便扱ひにせしなり、難易抄に『佛法は体世間は影』と斷じ、法華抄に『謗法の國なれば此國亡ぶべし』と論ぜしが如き、蒙古襲來に對しても、畢竟するに日蓮は「能い氣味」位に思つて居たので、要するに日蓮の國家觀は僞物なりとの評論をなして居る、其後高山博士の著書を見たが、木村の安斷とは其撰を異にし、やゝ可なるものあれども未だしと云はなければならぬ自分の研究によれは上人の國家主義は左樣な淺薄のものではない、或る學者の說に、愛國とは其國の自衛の發達なりと云ひ、或る學者の說に、倫理道德も時代に適應せざれば不可と論じて居るが、此論法よりすれば、人は其國と其時代に適應すればよし、正邪は敢て問はずと云ふ事になる、が上人の主張はそんな淺薄のものでない、國家に就ては先王の道、個人に就ては本能と云ふ風に、体道即、普及的不磨的のものを唱道し、而して敏活に其應用を企圖せられたのである、御都合主義は畢竟用道であつて、それには權威がない、此外に普及不磨にして而も權威ある体道なるものゝ有ることを考へねばならぬ、法華經は道の權威を說ける体道である、上人は此立場を逸しない、而して用道には『宮仕へを法華經と思召せ』と活釋せられた、上人の考慮には、道とは正法である、正法とは法華經である、國を思へば道を立てざるへからず、國を守らんとすれば道なかるべからず、立正と安國とは調和すべく離るべからざるものである、立正の爲めの安國、安國の爲めの立正、斯く考へられたのである、單に佛教ではいか

ない、最上獨尊の正法たる法華經を以て國を安んぜなくてはならぬ『彼國によかりし法なればとて此國にもよかるべしとは思ふべからず』とは這般の意味から出た語である、釋氏憲法にも小乘は日本の國体に合はず弘むべからずと斷はられてある

今一つ注意すべきは、上人の國家觀は方便でないと云ふ事である、『就中日蓮生を此國に得たり豈此國を思はざらんや』と斷はられたる如き、所謂太郎兵衛の子は太郎兵衛に孝を盡すべく、決して次郎兵衛と親子の關係はない、日本國民は日本の國家を愛すべく、決して支那の國民でも露西亞の國民でもないと云ふのである、此大義名分論は本尊觀の上にも非常に力ある論斷であつて、釋迦系の佛教徒が釋迦を廉外して大日を立て彌陀を崇拜する如き異現象は、名分上許すべからざる一個の大問題である、上人の國家觀は斯る意味に於て牢固として拔くべからざる確信の下に樹立せられて居る

尙ほ一つ日本の國体に就て逸すべからざる上人の主張がある、所は日本は「よき教」の起るべき事を神秘的に感じられたので、日本の名、上行の出現、さては『日は東より出でて西を照す日本の佛法月氏漢土をも照す』等の理想の發現に於て之を徵證することが出來る

次に上人を以て權略家なりと評するものがある、是れは上人に四大格言及び愛國觀等のあるのを見て、卒爾に下した妄評であつて、上人の四大格言は、透明なる智見より理非を明白に論斷せられたる、統一的大鐵槌である、其の愛國觀は不朽の大道より迸發したる根底ある大論斷である、決して屑々たる權略ではない、眞僞と云ふよりも寧ろ正邪の感念强かりしを證し得らるゝ、たとへば南北兩朝に就て南朝正統論の本義たることは、爭ふべからざる重なるが如く、釋迦を捨て法華經を捨てゝ而も佛教なりと云ふ、其厚顏實に驚くべきであつて、釋迦を捨つるは天皇を無みするが如く、法華を捨つるは憲法を捨つるが如く、天皇を捨て憲法を捨てゝ而も國民と稱し國政を云爲するは、斷じて許さないと同じく、釋尊法華に背ける佛教の存在は斷じて

認むる事は出來ない、此確信の下に行動せる上人の論調の激烈なる、寧ろ當然の事である、されば佐渡より赦され歸りて北條に對面せし時、猶揺聲の慧論に對つて、莊田壹千町何かあらんと、斷然として鉄を拂つたのは、是れ權略でも何でもない、眞に陋劣唾棄すべしとして叱吒せられたのである

次に上人は淺薄なる經典崇拜家にして、且つ倫理の感念少しと評するものがある、是れ亦上人の人格を知らざる妄評たるを免れない、經典崇拜……成程現代日蓮宗信者の弊風より見れば、此批評或は當れりと云はざるを得ない、寧ろ現日蓮宗の爲めには一大鐵槌であらう、されど上人は決してそうでない、遺書中だも〳〵經典崇拜なるかの如き文章なきにあらざるも、而も上人の眞意は決して然らず、上人の眞意は唯一本佛の實在と吾人との關係に就て、本佛の血液としての法華經を見、本佛と吾人と母子の關係に於て、母の乳としての妙法を見、水に溺れたる吾人と岸の上に在る本佛との救護救の關係に就て本佛の手に握れる救ひの網としての法華經を見られたのである、此場合に於て注意すべきは、主師親三德の佛陀を忘れて單に經典のみに執することは、斷じて上人の本意でないと云ふことである、本尊抄に『佛大慈悲を起し妙法五字の袋の内に此珠を裹んで末代幼稚の頸にかけさしむ』との聖判は分明に這般の意味を了解せられる、若しも此關係を見損ひ、佛陀を忘れて孤にても蛇にてもと云ふ樣に、本尊以外のものに對つて妙法を唱へ法華を讃するが如き、それは沙汰の外の事で、上人の本意を害する道路伽耶陀のものである、

又上人に倫理上の觀念なしとの批評は、上人に律國賊の論斷あるより來れる妄評であつて、成程古陋なる考へから云へば、上人は酒も呑まれた、一應之を見れば上人は佛教倫理を破れるが如しだ、上人は慥かに律を國賊と絶叫し、史上に名高き忍性菩薩良觀和尚を慈悲魔心摧折した、されど斯は是れ其倫道の根本本格を知らずして、其形骸にのみ泥着せるを破斥したのであつて、上人の意見は宇宙觀、人生觀の根礎に立ちて佛陀を如何に見るかを研究せざるべからず、さもなくして區々倫道の末を逐ふ、是れ佛陀出世の本懷に基き國家に有害の賊徒のみと云ふに外ならんのだ、今一つ實際的に言へば、總ての佛教徒は厭世に流れ平等に偏し迂遠に陷れり、宜しく區々の戒律を捨棄して、男らしく日本人全般の守るべき道德に來れと云ふのが、抑も日蓮上人の主張である、尙ほ上人の倫理觀に就ては、自分の編著にかゝる聖語錄の中に集め置きし所だけでも百數十ヶ所ある、どうか諸君の御研究を願ひたい、曉餐の時間が來ましたから、今日は之れで御免を蒙ります

△三宅博士の談話に就て▽

統一記者足下予は、東北人士である、南部馬の綽號を占有する者なり、予は遲鈍の譏りあれども、耐久力は予の誇とする所である、國粹活脫の於用はなけれども直進は予の自負する所である（由北人）

統一記者足下、予は關西人である、予は東京化したるを以て自ら街ふ所である、予は他より熱あり血ある快活男子の綽號を受けつゝあり、されど、予は自白す、直進邁進の男を敵するものであれど、中途利害の打算が念頭に浮び、事業中止すること、たび〳〵ありて聖病者になり、心陰に慚ぢることがあるハ平安聖士）

自我感應如是

在米國　横山南山

■佛說ひて法界はこれ我家衆生はこれ我心と教調を垂れ給ひしにせよ、身雲山萬里の異域に在り事に觸れ物につけて故郷を思ふ毎に、未だ曾て潸然として涙くだらざることなし、その何の故なるやを知らず雷だ哀情曼々として、一塊悲哀の何物かは高調の響きを洩らし、終には惑ひ悶へつ更に向上の道を歩まむと欲す、洵に故郷は吾人をして自覺せしめ感動せしむる、杳乎たるインスピレーションにして、吾人の故郷に父を戀ひ母を慕ひ弟妹を想ふ時、如何に心の底の悲しくて抑へ難きの情に泣く事よ、尊とき我師長懷かしき我朋友は故郷の山河に起臥し、吾人の爲めに笑ひ吾人の爲めに歌ひつゝあらむ、オオ此處四千浬外北米利加の地に放浪の身の、燃ふる情致を抱ひて故郷を愛し故郷を戀ふ、設令ひ身はロキツーの麓に落魄し、エリオット灣の波に波倫し、人の顧みるなきに至るも誰れか故郷を

忘れむや、故郷の青山故郷の綠水、これぞ宇宙の大觀より來る感應道交にあらざるなき歟、故山に親みて孳々として勵む者も、異域に疎じて汲々として努む者も詮ずる所は『諸作佛事』の聖業なりとは謂へ、詩に故郷を見舞ふて法喜に一夜を語り明かさばやと思ふ、易きこの所願にして我れ未だその人たらず、何んぞ又錦衣を欲し車馬を望んで世上の虛僞に走り、人間一代のやるせなき狂言の幕に翱翔するを好まむや、たゞ一日も早く故郷に歸りて見ばやと思ふ心の、輕軒失意の爲めにあらず、人生の不如意は人生の華にして佛陀の願海に船をぼりするも是れが爲めならむかし、中宵枯座意識水の如く流れて心靜かなるとき、思ひを故郷の空に寄す。嗚呼故郷は我が爲めには長への戀人なるよ、此の戀ありて我世淋しからず、旅人若うして月影細き夜半、佛陀の靈觀に觸れて法喜泉の如く胸に湧くあるを覺ゆ、眠らんと欲して眠むる能はず、乃ち筆を執て自我感懷如是一篇は成れり。

故ありと言ふにはあらねど故ありとして殊更に消息を斷ち、故山の師長に書を致さざること春夏秋冬茲に一歲、春は散る花に思ひを焦がし夏は綠蔭に精氣を養ひ、秋は月に歌ひ、冬は雪にありし昔の聖を想ひ、明け暮れ世の事相に遠ざからむとせる今日此頃、岡山の本涌山人事一上人は我れを親愛しみ玉ふ大悲の抑へ難くてや、頃日温かき情に綴られたる玉章を寄せて遙かに安否をそれと伺はれぬ、岡山教壇と能仁事一師、能仁事一師と橫山南山、こは大膽なる臆測の如けむも、我れの上人を悲母と崇め慈父と拜み、上人の我れを愛兒の樣にもいつくしみ給ふ情緒の、誰れかあつて之れを知らむや、さはれ上人の檀越を撫育教訓し給ふの情素より均しからむなり、唯我れが魯鈍の愚これを憐み給ふ道念に於て、我れに此の確信の言ある又何の不可なけむ、而かも上人の神慮を煩はすことの多くして、酬ゆることの尠なきを耻づ、今にして嬉し涙に咽びつゝは上人が我を愛する一團の情火は、遂にや信に薄き我をして靈の道に活かしめ『犧牲の信仰』を味識するの身となし給ひぬ、岡山にして上人なくんば暗淡たる

靈界何に依つてか光りを放たむ、岡山にして上人なくんば我れ誰れによりてか以信得入の實を得む、我愚既に上人の說化に浴するものあり況んや我れ以上の、一大行學を修めたる他の人をや、溢美の筆とな思ひ給ひそ、あら尊とくも尊き岡山靈界の法將よ。

『統一』一ヶ年分を能仁上人より惠送を受けぬ、餓へたる狼の肉を得たらむが如く、餓へたる旅者の泉にパンを得たらむが如く、綠蔭風涼しき所に之を繙きて幾度となく熟讀反覆しぬ、洵に法喜を妻とすと昔の人の謂ひけむ如く、興湧き感更につく如くもあらず、夙に嬉しかりしは幾多の法將道兄が近狀を知りし事なり、茲に所感を記して我が思ひを流露するも亦信仰の一念たるをや

鶯鳥幾度び萊因河を渡るも鳳凰とはならじ、我が本來の迂愚をして亞米利加に十年廿年を學ぶも、その行く末の覺束なきは、三歲の童兒に千斤の重荷を命じつるにも似たらんか、されど一匹の蚕よく六尺の力士を轉ろがすに比すれば、我が覺束ながらも抱持せる『犧牲の信仰』は之を他に及ぼすの或は不可能たらむも、自らを導くに足る底の安心と立命とは得らる可けんか、我れは既に安心の立命を確立して宗末を讀するもの、學才の如何は兎まれ『佛子の自覺』てふ觀念は常に吾人を現代に活かし、更に未來に活かす可し、人生の幸福何物か之れに過ぎんや、我れ既に業に此意氣と此自覺あり、光りある生涯の徑路よ。

我れ商家に生れて長男たり、二人の弟と二人の妹は之れを督勵すべき大責任また兩肩にあり、父母信心厚うして業に勵むこと我れ親ながら感じつゝあり、『法華を知るものは世法を得べきか』との聖訓もさこそと偲ばれて喜ばしきものを、如何なる抑因業果に蔽はれしや、性來商家のさまて好ましからず、その心は事に顯はれて父母の我が業に熱中せざるを憂へしめ、我は我ながら敢て父母の志に違反するの惡念にはあらねど、幸か不幸か家業を離れて今は此地にあり、父は大慈我れを思ふも男として餘りに世智臭き事は之を計らず、母は大悲我れを思ふの情、女として默し難く前途を憂

ふ親の心の情にや、囊にはやるせなき愛火を疑らして、父の家業の趣味を說ひて我れに歸朝を促がし來りぬ、父は默して之を思ひ母は默する能はずして之を思ふ、答へて心にもなき報を母に送りてその一時を喜ばせんか、答へて父が子を思ふ温かき情火に水の如き冷きた筆を送らむか、あゝ、我は今し物質界の靜寂なりし夜半、あやしき思ひに打たれ、疑ひ、惑ひ、悶へつ泣き明かしき、われ倩ら世相を觀じそめて頻りと故郷の戀しく、師長に會して我心を打ち明さばやと思ふ、夢にその事を見て驚き醒めてはその事を案じて惑ふ、流轉の世に人や何を望みの五十年の命ぞも。

■父母に別れ弟妹にそむきて我やひとり何の爲めに此地に來て漂泊よへる、我が誓ひし事の志と違ふてこれに背く事多し、月冴へ波靜かにしてしめやかなる夕べ海畔に冥想して遙かに天を仰ひで罪を謝せし事の幾度なるを知らず、辛に佛陀の加護厚ふして老ひ行く父母や、生ひたつ弟妹はいとすごやかなり、近く會して笑はむ事もありなむよ、『我子を戀しと思召さは南無妙法蓮華經と唱へさせ給へ』とは蓮祖が曾て宣せし聖語の一節なり、我れのあめもかにありて父母に祈り弟妹に禱る大願は、南無妙法蓮華經と唱へ候へと勸むるの外他事ある事なし唯これのみ。

■世事志の一分を全ふせしむるを得ば我れの『僧侶』と成らむと發心せし事の幾度なりしを知らず、悲ひかな、學淺く識乏しくして終に他郷の山河に流離の身となりぬ、かくて野外に響く松風は、一間としての我が悲願の聲を天籟の中に埋め了らしめんとす、此時來つて我れを救ふ者は誰れぞ其：なきか、オ、『信仰』は事實なりと聞くからには、我れにして信仰に活きつらむには成就せた難しともせざらむ、我れ未だ信仰よはくしてその望みの影をだにも認め得ざる、我が信仰は未だ初歩なるよ、大に修養して宗末について學ばんかな、蒼蠅驥尾に附して萬里を渡り、碧羅松頭に懸りて千尋に延ぶ、と聖日蓮の警句泣て掬す可からずや。

■思ふ事心に協ふ世なりせば、秋の哀れを知れる身の春には笑まむ術もがな、とは誰れが歌へりし、我れこの頃夢を見る事の頻りなり、夢にその人と語りて胸底の幽處を悲み、涙に枕冷たく覺ふるぞ哀れなる、水の如く冷たき社會は之を顧みず、温かき情操ある師長は之れを知らず、青春正に二十六、我は滿腔の熱情とこの夢の人に拂ひ、我れも又夢の人として終らむか、大慈大悲の佛陀世尊はよも笑ひはせまじ、期する所は靈山の寶土に眞如の月を拜して、ありし人間の世の思ひを打ち語るも又詩的なるよ、夢は夢として葬らむか信仰は事實なり、然り、事實として我は信仰に活きんと欲するもの也。

報道

○東京顯本協會記事　六月十二日は品川町妙國寺に於て正法護持會主催の演說があつた、この日は珍らしく品川方面や內藤新宿から純信の人が參つて參聽があり近來になき盛會でありし

豐富なる生活　石川顯隆師
本覺の栖は何處　笹川眞應師

石川師は信仰安心の上に築かれたる、如來の室宅に生活するの眞味を諄々として說き、笹川師は持法華問答抄の結文を引用して、日蓮上人の說かれたる淨土は架空にあらず抽象にあらず、信心受持の結果具體現前にある事を、熱烈なる銳利なる言論もて、指示せられたり、越へて

六月十三日淺草北清島町の常林寺に顯本協會常例の演說があつた、品川正法護持會より淺尾清造君が同信の一隊を卒ひて參聽せられ、他の聽衆も前會に增して多く見受けられた

佛陀は我父なり　石川顯隆師
開目の要義　堀見日潮師
三世通觀　笹川眞應師
佛陀　中心　關田養叔師

石川師は例の眞摯なる温言もて、父子の美を述べて餘す所なかりしは、洵に師の態度音聲が、我即是父の御佛に接見するが如き感を與へ、里見師が開目抄の一節を引いて、宗祖上人の覺悟を示して自己が熱涙に咽ぶ處自己が信仰を表白するに足るべく、笹川師が現世に偏せず、未來に偏せず三世を透ふして通觀するを佛敎の要義なるを明かし、感恩を意識するは佛敎の根源法華經書最品に根底あることを、沈痛なる態度に依て說かれたには聽衆の中に肅然として襟を正だすを見受けた、最後に關田師は登壇、彌陀藥師大日と、佛は數あれど、釋迦牟尼は、その中心なること恰かも我等國民の戴く天皇陛下と同じく、大義を蔑視するは不忠の甚しきと同じく佛敎徒として、釋迦牟尼を捨てゝ他の佛

にすがるは、佛教の大義に暗きものであると、例の輕快なる辯舌をもて道破せられたは、最後の覺醒を聽衆に與へしが如く思はれし

六月廿日谷中初音町の本授寺に矢張同會の演說が開かれた

佛陀と吾人　石川顯隆師
佛陀と修法　關田養叔師

これも前會よりは盛會で、參聽者非常に滿足した、生は所用の爲に拜聽するの機會を逸した

六月廿六日淺草吉野町の常福寺で顯本協會の演說があり、たが初會に拘らず百名内外の聽衆が靜肅に謹聽するを見受けたが、初會に斯の如き熱心の聽衆を得たのは催主よりは生の方が、悅れしかつた

開會の辭　藤崎通明師
所見を述ぶ　吉永義彦師
順化の實現　其一　笹川眞應師
法華行者の安心　關田養叔師
悲智相即論　其一　山根日東師

吉永師の說く所、將來の大導師たるべき好箇の青年を直覺せしめた、聞けば師はその導師たるべき器を成就すべく修學中であると、願くは自重せられよ、笹川師は「順化」の意義とこれを實現すべき要諦を述べ、關田師は「安心」の意義と之を決定する功果を說き、山根師は「佛陀の慈悲と智惠」は鳥の双翼車の兩輪の如き關係を辯じられた

六月廿七日は品川町本光寺に於て、正法護持會の催にかゝる演說會が開かれたが、當日は宗門有數の名士揃ひ、梅雨濛々天暗けれども、會場何んとなう、靈氣の通ふ覺へたり

慈法の主旨　今成乾隨師
順化の實現　其二　笹川眞應師
日蓮上人の傳を讀む　吉田堅城師
滿足と緊選　石川顯隆師
信仰の心得　關田養叔師
悲智相即論　其二　山根日東師
宗教の要は實行なり　森川寛行師

巨人今成師會主として開會のベルを鳴すべく登壇せられたが、その響は聽法利益の無限なるを說かれたは永く否な、本日の聞法思想に多大の印象を與へた　次に主人側として笹川師は、須彌山に近く衆鳥は皆金色となる順化の功は、偉大なる人格とその教訓によりて靈化せらるゝ所以と　身を以て當たる何事か成し遂げざる、身輕法重死身弘法は千古を貫く我が宗歷史の光輝なるを說く所、輕妙、吉田師は日蓮上人幼時の言行を布衍して他日雲蒸龍變大偉人日蓮の確信理想行爲を列擧し之を幼時に對照して、人格同化の必要なる所以を詳論せらる、學究に身を委ねる師の現狀に生は思を通はした、石川師は滿足は如何にして抱持するか、世間の滿足々々にあらず、精進によりて初めて滿足の滿足を味ふべきを說く、眞に親切、次に關田師は信仰の心得に於て新禱の眞意義を示し、その心得として二點を擧げ信心と申すは佛の心に從順するを第一義となすと

斷ずる所、流暢にして材料豐富引用正鵠、山根師は、無限の慈悲を識るには、子を以て初めて知る親の恩云云と實感談に入り遺憾なく、佛陀の恩德を述べられし所、眞摯にして餘情溢美、次に遠來の珍客森川師千葉縣より、たゞまか本光寺に滯在せられしは、如怪の幸ひと、切に會主より頼みて登壇を促がせり、師は頼基陳狀を引用し、冒頭に淫祠的宗教、厭世的宗教新禱的宗教あるの謂はれなきを、明所に判定せられ日蓮の宗教は實行的なる事由を頼基陳狀に依て論明し、法華宗の四條金吾々々々々と呼ばれ給へといへる生ける教訓は今日に於て純信仰の人の、踏襲すべきものゝ色談を德德して來境　その演說振りは壯麗、

上以は六月中の東京活動の大概である爾後倍々奮勵せらるゝてあらう、生は非才を顧みず年輩諸師を些少品隙したがその罪甚だ輕くない幸に寛容を賜らんことを

（香樹生）

本佛の妙用　中原透應
二種の一念三千　石川顯隆
等覺と思惑　笹川眞應
信仰の根本義　關田養叔
心の寶を積みたまへ　山根日東

○七月四日淺草常林寺　に於て本會主催の演說會があり而して演題及び辯士は左の如し

中原師は論旨溢滯なく本佛三輪の妙用を說き、石川師は議論卓拔に古來難解とする所の事理二種の一念三千を簡明に示し、山根僧正は談論莊重に日蓮上人の倫理の絕妙なる所以を諄乎として述べられ、笹川師は精確なる論據によりて求道の必要と是を護持すべきを快活に敎へられ、關田師は論格嚴として信仰の歸趣する所を叮寧に指導せられたり、思ふに本日の演說は山根師は月の皎々として西山にかゝるが如く、關田師は寒梅の香氣を送るが如く、笹川師は寄松嚴雪に登へたる如く、石川師は清江に船を浮べたるが如く、中原師は桃の夭夭たる其葉蓁々たるたるが如く生の感想に浮んだ妄評多罪

當日出席の會員は、金坂田島山根關田大須賀笹川石川山田の諸師、

△神戸顯本敎會の大發展　多年聞達の虛榮を避け、專心傳道に熱中し、神戸を中心に布敎せられたる上田智量師は、その功蹟空しからず近來大發展を現實し、遂に六月廿一日管長本多上人を請じて、神戸顯本敎會の光明を增進すべく、大演說會を催されたり、本多上人の講話は「人道の本源」と題し、現代人道問題に對し快刀を下したるが如き感あり、特に本誌の卷頭に揭載することゝなしぬ

△千葉縣濱野本行寺の圖書館　仝寺の藏書に珍本數多ありこれを筐底に秘するよりは、普ねく篤學者の閲覽を自由にせしむるに如かず、殊に近代出版界の盛況に伴ひ、己人にして各種の圖書を購讀するの困難なるをや、寺主中村師此に願みる所あり奮然決起して、本館を設立することになれり、慈惠思想の幼稚なるは日本

國民の欠點なれば、之に當たる人の勞苦經營の尋常ならざる素よりその所なれども、願くば此の美擧に對し深き同情を寄せられん事を、記者は切に望む所なり

△顯本法華宗宗務總監の更迭　清廉にして簡明の聲聞ありし山根日東師は、聖祖の主義を大發展する點に就て、その理想確信を實行するために辭職せられ、その後任には德望家の野口日主師が就任せれたり

△同宗中央經營委員の選任　本多管長猊下は教義宣揚のために苦慮遊ばされ、囊きに訓諭を發せられ佛子の本領を自覺して、その職に盡瘁すべき樣戒飾を加へらるゝ等、大に道念振起に努めたまへるが、今回今成山根鈴木井村笹川國田藤崎の七師を中央經營委員に任命せられ、帝都傳道の實を擧ぐるために、且は時勢の推移に伴ひ、墓地移轉等に就ても其筋の主旨を體認するは勿論、自己中心のみに拘束せず宗義發展の信念を實現する樣、各寺住職及び檀信をして遺漏なからしめんとして、如上の七師を特任せられたる義なれば、各寺に於ても管長猊下の仁心を感受し、また委員に於ても曠職の譏りを招かざる樣、この選任に對して職責を完了せられん事を祈る、記者の寡聞各宗當路者に於て未だ斯かる機關の設けあるを聞かず、故に特に記してこれが光輝ある成功を翹望する所以なり

●千葉縣聯合布教師會仝會は昨年六月中縣下各教區布教の連絡及發遂展を圖らん爲め組織せられ其の活動大に踏るべき者ありしが未だ以て足れりとせず本月四日縣下大網町蓮照寺に總會を開き各教區順次毎月壹回の大講演會を開き宗義の擴張信仰の鼓吹を圖るべく決議し本月拾九日第壹回例會は濱野本行寺に開會し七月四日は長生郡眞名本源寺に開催せらるべしと云ふ因に仝會は今回更に規約を改定し會長副會長を設け布教師にして大會に三回以上出席せざれば宗務廳に上申所置を求むる等が重なる條項にして會長に中村乾信師副會長に森川寛行師當撰せりとの事なり

◉作陽通信

影山謙二

△天晴會津山支部發會式の光景

我作州に於ける宗教界は他派他宗の僧俗は、例に依て例の如く何等社會に貢献せんともせず、莞々たる幾多の堂宇は唯だ空しく吾人をして往昔、佛教盛時の樣を偲ばしむるに止り申候。又た我顯本法華宗に於ても山名師の東上、梶木師の轉住に依て一時　頓に寂寞の黑幔と相成り居候ひしも、先き頃再び山名師の駐住せらるゝに至て茲に我々在俗の信徒も大に力を得たれば「内に智化、外に外護」の聖訓のそれの如く活動を開始せんづ腕を扼して罷在候折柄　貴會の組織、發表、活動の御有樣を拜承し、過般山名師より照會せられ候如く遂に貴會の支部として津山天晴會を組織するに至り申候。而して此支部の發會式は去る六月の第二十曜日即ち十二日を以て津山坪井町の劇場「若葉座」に發表の

大演説會を開會仕候、出演の辯士は

▲開會辭山名木信師は過去三十年來我國に横流したる物質的惡文明の結果を論殊し將來須らく宗教に根帶して健全なる思想を涵養して强健にして且つ品性ある國民を造るは實に國本培養の第一義なりと感ずるが故に本會を組織したれば世間求道の士は宜しく來て共に本會の善友たれとの趣旨を述べ▲第一席桝本萬治郎氏　氏は慶應義塾の出身なるが「文明の宗教」の題下に予は世間の稱して謂ふ處の高等教育一通りの教育を受けたれども倩ら靜思するに今の科學教育丈けにては到底精神の奥底を修養するに難きを覺り遂に宗教を欽求するに至り宗教にても佛教、佛教中にては日蓮上人の教義こそ所謂方今の文明を大成する所以の教へなりと信じて本會に加盟したりと▲第二席今井壽氏、氏も亦禪澤翁門下の士なり「人生の眞目的」の題下に「生死即涅槃」の聖語に論據を構成して雄辯滔々吾人本有の佛性を闡明論證し宇宙同化、萬物一如の妙諦を語り。聖祖の「妙は死、法は生也」の旨に歸結し▲第三席高木本順師は「日蓮上人の教化」の題を掲げて本門の戒壇論を以て諄々三十分▲第四席林日法翁は「信仰」の題下に予は當年取て八十二才なるが過去既に二十有餘年の間日蓮上人の教へを信仰し來りたり、熟ら思ふに立ち返へり〳〵て導き給ふ法りの教は法華經の外なければ滿堂の諸君も法華經を信仰せられよとて無限の法悦を語りて聽衆が急霰の如き拍手喝采の裡に降壇し▲第五席河野稻太郎氏、氏は全科醫なり「所感一束」の題下に開口先づ曰く予は醫士として十年來診療の事に從事せるが投藥簿に依て統計する一ヶ年間に於ける患者數平均約二千二百餘名其内にて予が認めたる死亡診斷書の數は一ヶ年に八十名餘なり即ち平均死亡人數は總診療人數の三分三厘に當る而して其死亡者の中にても老いたる母が若き一人息子に先き立たれ、若き夫が妙齡の婦に最愛の兒女を遺し置きて死する等人生悲慘の出來事に逢遇する度毎に無情の感慨に打たれざるは莫しと說き起して一種の科學的無常觀とも稱すべき論歩を以て諄々說き來り說き去り「上は非想の雲の上、下は那落の底迄も生を得て死を免かるゝものやはある、小野小町、依通姫が花の姿も一朝無情の風に散り樊噲張良が武勇に達せしも獄卒の鐵杖に悲む」の聖訓の大旨に論入し宗教に依て人生最大の慰藉を得、且つ安心立命の地歩を成す事の必要を論明し竟に「日蓮幼少の時より佛法を學び候けるが先づ臨終の事を習ふて而して後ちに他事を學ぶべし」の聖意に歸結し▲第六席森治郎氏、氏も亦刀圭家なり「所感」の題下に人には癖無ふして七癖と云ふ、人間たれか缺點なからん而して此缺點を濟ふの法は科學か道學か非らず、實に佛教なり、又た佛教中にても其活ける信仰の身に活現ある人格最大の宗祖の教に須たざるべからず、茲に於て予は宗教界

に予の理想の人格を求めて日蓮上人其人を得たり依て予は後來上人の人格の餘、遺風の跡に縋りて治心の法を學ばんとす▲第七席高田日暢師、師は「日蓮上人の特長」の題下に熱烈燃ゆるが如き態度を以て聖祖獨特の佛陀觀、教科論、統一主義を縱横無盡に論道設破し意氣天に沖す▲第八席能仁僧正、僧正は之れ本日の發表大演說會に際し關西に於ける天晴會の本部員を代表して出席せられたるなり、師は當日の責任辯士として「天晴地明」の題下に觀心本尊抄の「天晴ぬれば地明かなり法華を知る者は世法を得べきか、一念三千を知らざる者には佛、大慈悲を起して妙法五字の袋に此の玉を包みて末代幼稚の首に懸けしめ玉ふ」の聖語を援き、又た「一切世間の善論は皆此經に因る、若し深く世法を識れば即是れ佛法なり」其他「夫れ一切衆生の尊敬すべきもの三あり所謂主師親是れなり、又習學すべきもの三あり儒外内是れなり」又た「若し俗間の經書、治世の語言、資生の業等を說くも皆正法に順ず」等の幾多の經釋を撰出して「百方より天晴地明の語原及び意義を論明し進てかの基督教が感情一偏の立儀に依て教を爲せるの淺薄取るに足らざるを駁し儒教は世間一面の道義德行に形式を立て教へたるのみにして未だ絕對觀に透達し居らざれば人格の實在を觀念するに對境の得て據るべき無ければ之れのみにては不充分なれば所詮は佛陀の三世を貫いての大教に歸依せざるべからず、神道各派の更に論ずるの價値なき事等雄辯鏘々、博引傍証、論斷明拆、聖祖折伏立教の大義を明かにし「佛滅後二千二百二十餘年の間、迦葉、阿難等、馬鳴、龍樹等、南岳、天臺、妙樂、傳教等だにも未弘めたまはざる法華經の肝心、諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始に、一閻浮提に弘まらせたまふべき瑞相に、日蓮、先かけしたり、若黨共、二陣三陣つゞいて、迦葉、阿難にも勝れ、天台傳教にも越えよかし、僧の小島の主等がをどさんに恐れては閻魔王の責をば如何すべき」に歸結し一時間半に涉る一大獅子吼に五百の聽衆を醉はしめて降壇せられたるは當夜十二時三十分なりき

右樣の次第にて殊に最も聽衆の入場先づ肝を潰したるは此の演說會に出演辯士の多き事にて有之候ひき、演題のビラ札　麗々數掛け連ねられたるもの十二枚　斯〻る演說會は津山ハジマッテ以來の事なりと皆々申居候、其内の九人は登壇演述したるも他の三名、玉置關治郎氏（日蓮上人の生々主義）秋山寬治氏（予の見たる日蓮上人）と予（日蓮上人と國民の將來）とは時間に餘裕なかりし爲め到頭出演するに至らずして止み申候尙ほ當夜の聽衆中には臨床家としては屋貫熊治郎千田治之吉の兩氏、小澤津山町長、石名津山銀行支配人、其他學校教師等隨分と所謂耳のある人多數相見受け申候、去れば今後不屈不撓の熱心を以て努力致候得ば貴會本部諸公の驥尾　附して「廣宣流布」の一助をも或は爲し得らるべけんかと一同打ち喜び居り申候　紳々百拜

會津妙法寺本堂再建寄附金申込廣告

（第三回）

金六圓也　第四教區　光福寺住職　富田宏觀
金三圓也　爲亡南親菩提　全　人
金五十圓也　第五教區　萬光寺住職　伊藤寶樹
金五圓也　全　蓮華寺住職　齋藤義豊
金二十圓也　全　長興寺住職　勝山善遵
金十四圓六十錢　全　東榮寺住職　廣郎乾山
金二十圓也　全　光昌寺住職　朽木日導
金十圓也　全　善勝寺住職　小川日圓
金八圓也　全　本壽寺住職　中村會意
金八圓也　全　常眞寺住職　松本眞釋
金十二圓也　全　寶藏寺住職　森安日觀
金三圓四十錢　全　寶形寺兼務　全　人
金六圓也　全　法雲寺住職　鶴岡雅中
金九圓四十錢　全　正立寺住職　柳生榮叔
金五圓四十錢　全　能泉寺住職　關谷眞應
金六錢也　全　大澤寺住職　島本順祐
金七十錢　全　長榮寺兼務　全　人
金七十錢　全　圓能寺住職　田中榮應
金七十錢　全　正因寺兼務　全　人
金三圓也　全　光明寺住職　米倉義明
金十圓六十錢　全　安立寺住職　伊藤憲洪
金一圓也　全　眞福寺兼務　齋藤義豊
金五圓四十錢　全　善德寺住職　金田智哲
金六圓也　全　法行寺住職　富田廣演
金四圓也　全　常圓寺兼務　金坂什隆
金六圓也　全　妙照寺住職　金坂學信
金三圓也　全　本泉寺住職　永瀨量一
金六十八錢　全　高福寺住職　阿部義貫
金六圓也　全　法輪寺住職　太田泰龍
金五圓四十錢　全　西谷寺住職　金坂敎隆
金二圓也　全　寶善寺住職　尾崎旭英
金六十八錢　全　滿榮寺兼務　松平五峰
金六十八錢　全　高壽寺兼務　井口善叔
金四圓八十錢　全　法　光寺
金一圓也　全　法泉寺兼務　太田泰龍
金二圓四十錢　全　常泉寺住職　松平五峰
金六圓六十錢　全　法秀寺住職　小高日唱
金六十錢　全　本休寺住職　內山是眞
金五圓四十錢　全　覺行寺住職　吉田俊學
金五圓四十錢　全　本榮寺住職　石井寬俊
金六十錢　全　三願寺兼務　關田養叔
金十圓六十錢　全　正法寺住職　秋葉純一
金六十八錢　全　最光寺兼務　全　人
金一圓也　全　妙照寺兼務　全

天晴會主催

夏期講習會

會期　七月廿一日ヨリ十日迄

會場　片瀬龍口寺

（詳細は二八月號の統一を見よ）

偉人の靈光活力は萬古を通じて世の師表たり、求道の要求は我が國民の熱望する所なり、眞に之を欲せば奮然自我の念を捨てゝ、正義正師の指導に從順せざる可らず、本會は此の要求熱望に對し滿足を與へんとして當代の名士を數名に懇請して大講習會を開催するもの也十日間滞在費金五圓聽講料金壹圓學生は十日間滞在費金參圓聽講料金五十錢別かる僅少の金額を以て、十日間絶大の法悦に浴するを得らるべければ、速に申込まる可し

淺草區新谷町十四番地慶印寺内

天晴會

統一主義

△八月八日午後一時開催▽

佛教大演說

淺草北清島町　常林寺

日蓮上人の信仰人心救濟の機

本尊の實義

統一主義とは何ぞや

石川學統　笹川僧都　關田僧都　山根僧正

△八月十二日午後一時開催▽

佛教大演說

正法光顯

府下品川町　妙國寺

前後本末

實乘の一善

佛教とは何ぞや

石川學統　笹川僧都　山根僧正

御待ち兼ねの

大石養淳著

日蓮宗說教書

發刊となる

七月五日より悉く豫約申込者へ頒了せり

本價一圓の處初刊の法喜として五百名や限り金八十錢にて應ずべし送料は本社持ち（但し代金引替は此限りにあらず）

但し五百名に至れば何時にても謝絶すべし

發行所　後志國古平港古平町二六三　北天教光社

管長大僧正本多日生師序

文學博士三上參次先生序

僧正野口日主師題字

故僧正清瀨貞雄師著

菊判五號活字二百頁全一冊

定價金五十錢

郵稅六錢

興國の宗教

本書は戰勝新興國たる大日本國民の選擇すべき宗教問題を論述したる大文字にして筆力縱横理義條然宗教家は勿論苟くも靈の糧を要する求道の士は必ず一本を購ふべき要書なり

發行所　東京府荏原郡品川町南品川宿四一二番地（振替貯金東京壹貳壹九番）　統一團

發賣所　東京市京橋區南傳馬町三丁目五番地（振替貯金東京四九六〇番）　須原屋

（三法堂目印）

●木像　木佛具　金佛具　厨子　大販賣

佛書表具の元祖各宗御寺院御入用品一切何にても多少に不限御注文仰付らるべし佛書は申すに不及御肖像書專門

木魚位牌卸小賣

小包料例附郵券四錢

三法堂

諸品發賣目錄（正價付）

注意

佛書佛具佛像位牌木魚其種類品有之候を以て一々記載する能はず依て特に佛書正價附發賣目錄書を作製致置候に付御入用の諸君は郵券四錢御送付被下候はゞ迅速進呈仕候此の目錄御用ゐになれば寺院樣方の御入用品一切の買物何程濟方ても座ながら安價にて買はれ升其の正札附の品は左の通り

●佛書具一切●過去帳の類●大般若經●一切經●理趣分●太鼓●佛具金物一切●釣鐘●半鐘●木魚●拂子●曲錄●香炉●位牌●太鼓●鐘子●中啓●傳燈●錫●金襴●經●水引●數●和幡●唐鞘●人天蓋●樂器●類●旅寶鬼●幡屋●根●木●厨子●木●華●經●機●磬●字●懸●盤●膳●座●具●三寶●鐵●鐵●中●行●鉢●量●器●自●鉢●器●寶●鐵●茶●器●皇●子●蓮●鉢●量●器●自●鉢●文●庫●獻●茶●器●皇●子●蓮●鉢●量●器●自●鉢●水板●經●物●奉●具●鐵●鐵●香●具●鐵●鐵●香●具●鐵●正●燈●にて御買物座なから自由自在（電話二七八三番）振替貯金大阪二〇七一）

各宗御本山用達　京都小橋三條通西島町四入　三法堂

各佛具師　藤田總治

今町小橋東入下ル

三法堂陳列場

誌則

一發行期日　毎月一回十五日

一誌料　一冊金六錢、十二冊前金六十五錢

郵券代用は一割增、但五厘切手を可とす

一廣告料　一頁拾圓、半頁六圓、四分ノ一頁三圓五十錢、特別廣告十五圓ヨリ二十五圓マデ

一購讀申込　住所氏名を楷書にて認められたし

一代金拂込　振替貯金を便とす、拂込用紙は最寄郵便局より受取られたし、但し此の場合は誌料の外に金貳錢を振替口座手數料として餘分に拂込ありたし

明治四十二年七月十五日印刷發行

發行人　井村咸

編輯人　山根東

印刷人　鈴木日雄

印刷所　北澤活版所

東京府荏原郡品川町大字南品川宿四百十二番地

發行所　統一團

（振替貯金番號東京一二一九）

藏書

統一

第百七十四號